

《研究報告》

初回臨地実習における学生のコミュニケーション展開の特徴 — 受け持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録の分析 —

渡部 菜穂子¹⁾, 工藤 千賀子¹⁾, 阿部 テル子¹⁾

要旨：研究目的は、初回臨地実習における学生と受け持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録を分析し、学生のコミュニケーション展開の特徴を明らかにし、教育上の示唆を得ることである。38例の再構成記録の記述内容を南（1967）の理論に基づき、意図の有無、患者に意図を伝えているか、意図に沿ったコミュニケーション展開が行われているかについて分析した。その結果、意図を持ってコミュニケーションを行っているのは29例で、実習2・3日目に多く、意図を持たないコミュニケーションが実習1日目に多かった。また、学生は意図があってもそれを患者に伝えずにコミュニケーションを始める傾向があった。コミュニケーションの意図は、＜入院生活の様子を把握する＞、＜情報を確認する＞、＜観察や援助を実施する＞、＜挨拶をする＞ことなどであった。コミュニケーション展開は、意図がある場合は1つの話題で表現-反応を複数回繰り返しているが、意図がない場合は、学生が質問し患者が答えると、話題を変えて次の質問をするといった、一往復の表現-反応で脈絡もなく話題が次々と転換する傾向があった。

キーワード：初回臨地実習、コミュニケーション、意図、再構成記録

I. はじめに

看護において、対象者である患者の理解、および他の医療従事者との協働のためにはコミュニケーション能力は欠かすことができない。しかし、看護学生のコミュニケーション能力の乏しさ（川田ほか, 2005）や、コミュニケーションに苦手意識を持つ看護学生が多いこと（酒井, 2010）が報告されており、看護基礎教育における学生のコミュニケーション能力の育成・強化が課題となっている。

我々はこれまでの基礎看護学実習における指導経験から、本学部学生においてもコミュニケーションに関する先述の問題・課題があると感じ、学生のコミュニケーション能力向上への取り組みが必要であると感じていた。しかし、その課題に対処するためには、学生のコミュニケーションの実態と問題の把握が必要であると考えている。

看護学生のコミュニケーションに関する研究では初

回の臨地実習や、初期の学生のコミュニケーションの特徴を捉えた研究も多く、学生は患者の言語的メッセージだけではなく、表情や行動といった非言語的メッセージも捉えていること（岩崎ら, 1999）（井上ら, 2006）（岡尾ら, 2010）、コミュニケーション中、学生は患者の感情や思考に関心を向けている割合が多いが、患者との関係性や、自分の感情などに関心が向いている学生もいること（林ら, 2012）、患者の言動を受け止めた反応、励ましが多く見られること（岩崎ら, 1999）（久米, 2005）などが報告されている。一方、学生の抱える課題として、患者の表情・言葉のサインを感じていてもそれを自分の反応として表現し、患者に返すことが困難であること（岩崎ら, 1999）、単一の情報で患者の内面を判断したり、学生の推測した患者心理による決めつけた対応が多いこと（岡尾ら, 2010）（林, 2012）、初期の学生の言語量が看護師や臨地実習終了学生より少なく、必要な情報を判断して言語的コミュニケーションをとる技術が不十分であるこ

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：渡部菜穂子 〒036-8231 青森県弘前市稔町20-7

TEL：0172-31-7100, FAX：0172-31-7101, E-mail：nwatabe@hirogaku-u.ac.jp

と(工藤ら, 2010), ロールプレイング演習で, コミュニケーション場面の後半になると, 「沈黙」「視線をそらす」「関係のない笑い」が多く出現すること(久米, 2005)などが明らかにされている。これまでの研究では, 学生のコミュニケーションの特徴を, コミュニケーションの構成要素や学生の思考・感情などの一側面を明らかにしているものが多く, 看護学生と受け持ち患者のコミュニケーションがどのように展開されているかについては十分に明らかにはされていない。

ウィーデンバックら(2004)は, 効果的な看護を行うためのコミュニケーション技能の決定因子の一つに「意図の明快さ」を挙げ, それはコミュニケーション展開およびコミュニケーションの効果にも影響を与えると述べている。また, 南(1967)は, コミュニケーションの本質として「送り手の意図」を挙げている。そこで, 今回, 学生のコミュニケーション能力向上に向けての教育的な示唆を得ることを目的とし, 初回臨地実習における学生と受け持ち患者のコミュニケーション場面の再構成記録を, 「意図」があるか, また「意図」の内容に沿ってコミュニケーションが展開されているかに注目して分析し, 学生のコミュニケーションの特徴を明らかとすることとした。

研究目的

学生のコミュニケーション能力向上に向けた教育的な示唆を得るために, 初回臨地実習における受持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録から, 「意図」の有無に関連したコミュニケーション展開の特徴を明らかにする。

用語の定義

1. コミュニケーション

「生物の個体と個体の間で, 個体の表現する行動が, 他の個体に伝えられること。人間のばあいには, 各人が内部に持っている欲求, 能力, 感情を相手に知らせることであり, なかでも言葉は人間のコミュニケーション手段のなかで, もっとも有力なものである」(南, 1967)

2. 意図

『ある「主体」が, ある「行為」を行うことによって何かを実現しようとする, その主体の「自覚的な意

識」のこと。〈ある「行為」を行うこと〉は, 意図を伝える方法, あるいは「意図」を顕在化させる手段であり, 〈何か〉は, 実現すべき意図の内容である』(蒲谷, 2002)。患者 - 看護師(看護学生)の関係では, 互いの意図を伝える方法は, 言語・非言語的コミュニケーションであり, 〈何か〉とは, コミュニケーションの目的を指す。

II. 研究方法

1. 研究対象

研究対象は, 2011年度「基礎看護学実習 I」(2012年2月)において, 学生が記述した受持ち患者とのコミュニケーション場面の再構成記録である。当該実習を終了した57名の学生に研究についての説明と協力依頼をし, 協力の同意が得られた36名(63.2%)の記録を対象とした。「基礎看護学実習 I」は, 1年次後期後半に行われる実習で, 学生にとっては初めての臨地実習である。コミュニケーション場面の再構成記録は, この3日間の実習中に, 学生が受け持ち患者と行ったコミュニケーション場面の中から任意の一場面を選択し, その場면을忠実に再構成して記録したものである。

2. 分析方法

南(1967)の「コミュニケーションにおける送り手と受け手の関係」に基づいて要素ごとに記述内容を抽出し, 学生のコミュニケーション展開の特徴を分析した。南は, コミュニケーションは, 送り手の意図することと, 受け手の要求することが互いに知られ, 了解することから始まり(前提), 送り手は伝えようとするものの意味内容を言語・非言語的手段を調節しながら表現し, 受け手は理解しようと反応を返す(実施)。コミュニケーションが終わったところで送り手は, 受け手に効果を与えたことを期待し, その効果を確かめるために, 質問をしたりして測定する(事後)と述べている(図1)。

そこで, 再構成記録の記述内容を次の4点から分析した。(1)何日目のどのような場面について記録されたものか, (2)意図(コミュニケーションの目的)は記述されているか, (3)学生は患者に意図を伝え, 患者の了解を確認してコミュニケーションを始めているか(4)コミュニケーションの実施は, 意図に沿った内容で展開されているかの4点である。

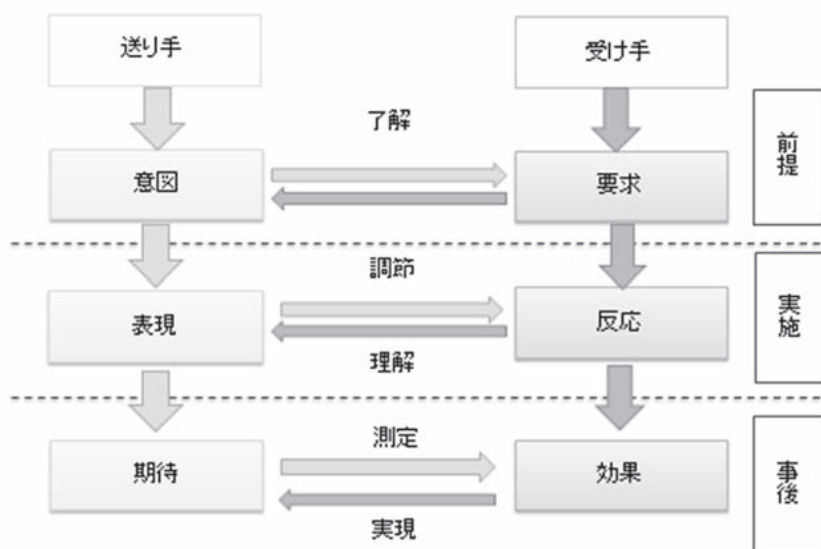


図1 コミュニケーションにおける送り手と受け手の関係
(南, 1967「体系社会心理学」参考)

分析は、データ化した再構成記録の記述内容を研究者3名が、各々、1例ずつ精読して分析の要素(1)～(4)に該当する部分を抽出した。(4)については、コミュニケーションの実施部分の「学生の言動」「患者の言動」が、意図に沿った内容の表現-反応であるか、意図から外れた内容の表現-反応であるかを繰り返し読みながら解釈し、内容ごとの表現-反応の回数も把握した。表現-反応の回数は、表現されただけでそれに対する反応がなかった場合を表現-反応1回、一言の表現に対して一言の反応が返ってきた場合を表現-反応2回とカウントした。

分析内容の妥当性を高めるため、研究者3名の抽出結果を持ち寄って照合し、不一致がある場合は合議して再検討し、その結果をもって最終結果とした。

3. 倫理的配慮

本研究は、所属大学倫理委員会の承認を得て行った(受付番号12-02)。学生への協力依頼は、実習成績開示後に文書と口頭で行った。依頼にあたっては、研究の趣旨、データの収集方法、参加・不参加の任意性、同意後の撤回の自由、個人情報保護とデータの取扱い等について説明し、同意書の提出をもって同意を得たものとした。データとした再構成記録は、協力依頼時に配布した封筒に同意書と同封してもらい、鍵のかかる回収箱に投函してもらった。分析時に個人が特定されないようにするため、再構成記録の記述内容を全て

Excel 2010でデジタル化し、データとして使用した。

Ⅲ. 結 果

1. コミュニケーションの場面

学生36名が記述したコミュニケーション場面の再構成記録には、1つの記録に2つの場面が記述されたものが3例(ID9①②, 24①②, 27①②)あったため、それぞれを2例に分けて分析した。また、受持ち以外の患者とのコミュニケーション場面を記述した1例(ID10)を除外し、計38例を分析対象とした(表1)。

これらを、何日目の場面かによって分けると、1日目が9例、2日目が4例、3日目が14例であった。記載内容に「○日目」という明確な記載はないものの、全体の記述内容から1日目以外であるが2日目か3日目が判別できないもの(以下1日目以外)が11例であった。コミュニケーションの場所は多くが病室で、学生と患者が1対1で会話している場面を取り上げている。また、実習1日目の9例中6例(ID5, 12, 20, 21, 24①, 29)は、学生が初めて患者と会話する場面であった。

2. 意図の有無

38例から、コミュニケーションの意図と判断できる記述内容を抽出した結果、意図の記述のある場面(以下、「意図あり」)が30例、記述がない場面(以下、「意

表1 コミュニケーションの場面の概略

No.	何日目 (例数)	場所	ID	どのような場面か	
1	1日目 (9)	病室	5	初めて患者さんと対面して会話をする場面。	
2			12	患者と初対面で会話する場面。	
3			20	看護師長の紹介で初めて患者と対面した場面。	
4			21	挨拶するため、初めて患者の病室へ行った場面。	
5			24①	初日、自己紹介し初めて会話した場面。	
6			29	初めて受け持ち患者とコミュニケーションした場面。	
7			24②	教員と患者のコミュニケーションを見学した後の場面。	
8			26	患者へ休憩から戻ったことを伝えに行った場面。	
9			1	看護師の助言でカルテから情報を得て、会話した場面。	
10	2日目 (4)	病室	15	朝のバイタルサイン測定後、リハビリの時間まで会話した場面。	
11			23	朝、患者さんとコミュニケーションした場面。	
12			25	患者が2か月ぶりに購買でアイスを買って、食べる場面。	
13		ナースステーション前	22	リハビリ後、患者がお茶を飲んでいていた場面。	
14	3日目 (14)	病室	4	実習最後のコミュニケーションをした場面。	
15			8	午前のリハビリを見学した後の場面。	
16			9①	朝の申し送り後、コミュニケーションした場面。	
17			14	実習最後のコミュニケーションをした場面。	
18			17	実習終了間際、患者の冷たい手にタオルを巻こうとした場面。	
19			27②	理学療法士が迎えに来るまで、食堂で待っている場面。	
20			28	朝から偏頭痛で休んでいた患者に、リハビリの声掛けをした場面。	
21			31	看護師から鏡と櫛とご家族の写真を渡され、整容した場面。	
22			32	昼食前、患者とのコミュニケーションした場面。	
23			33	回診後、患者がずっと点滴を見つめていた場面。	
24			36	実習最後にお礼を言った場面。	
25			廊下	9②	車椅子で病棟内を散歩した場面。
26			廊下・病室	19	患者が医師と面談後、車椅子で廊下にいるのを見かけた場面。
27		病室・トイレ	27①	患者がリハビリ前にトイレに行った場面。	
28	1日目以外 (11)	病室	2	バイタルサイン測定後の場面。	
29			3	排泄回数報告後、看護師の指示で体調等を聞きに行った場面。	
30			7	朝の挨拶をしようと患者様の病室へ行った場面。	
31			11	昼食前、看護師が嚥下体操に来るのを一緒に待っていた場面。	
32			18	昼食前、食堂に移動する時間になるまで会話した場面。	
33			35	患者と病室で話している場面。	
34			食堂	13	昼食時、患者へ配膳した場面。
35		食堂	30	嚥下体操中、患者が話しかけてきた場面。	
36		病室・リハ室	34	患者が病室からリハビリに移動し、リハビリを行っている場面。	
37		リハビリ室	16	リハビリ室で患者が、作業療法士と絵を描いていた場面。	
38		廊下	6	患者と車椅子で散歩している場面。	

図なし)が8例であった(表2)。

「意図あり」の30例をさらに、何日目の記録であるかで分類したところ、実習1日目が3例、2日目が3例、3日目が13例、1日目以外が11例であった。また、「意図なし」の8例については、実習1日目が6例、実習2日目が1例、3日目が1例であった。実習1日目は「意図なし」が多く、実習3日目は「意図あり」が多かった。

意図の内容は、＜患者の入院生活の様子を把握する＞、＜情報を確認する＞、＜観察や援助を実施する＞、＜挨拶をする＞などであった。その内容を具体的にみると、＜患者の入院生活の様子を把握する＞では、

「ID9①患者の今の思いを聞く」「ID15患者が不便に思っている事を聞く」「ID22入院生活で困っている点を聞く」などであり、＜情報を確認する＞では、「ID3どうして便がでないのか、でないことで体に不調がないかを聞く」「ID4気になっていた睡眠のこと、車椅子のこと、トイレや室温のことを聞く」「ID8リハビリ中に腰を痛そうにしていたので、痛くはなかったのかを確かめる」などが記述されていた。また、＜観察や援助を実施する＞では、「ID2バイタルサインの測定をする」「ID6車椅子で散歩させようと思った」「ID9②車いすで散歩する」などが、＜挨拶をする＞では「ID7朝の挨拶をしよう」「ID14実習終わりの挨拶を

表2 コミュニケーションの意図

意図の有無	何日目	ID	意図に関する記述内容	
意図あり (30)	1日目 (3)	1	よりよい人間関係を築くために、カルテの情報を入れて会話する。	
		21	実習をさせていただくため、まず最初に挨拶しようと思った。リハビリの後で患者が疲れていると思い、自己紹介だけして帰ろうと考えていた。	
		24②	就寝時間、起床時間を知りたい、家ででの生活と違う点は何か、家でどのような生活をしてきたかを聞く。	
	2日目 (3)	15	患者が不便に思っている事を聞く。	
		22	患者が入院生活で困っている点を聞く。	
		23	前日、背中と腰が痛くて寝不足気味だと言っていたので、今日はどうか気になった。	
	3日目 (13)	4	気になっていた睡眠のこと、車いすのこと、トイレや室温のことを聞く。	
		8	患者がリハビリ中に腰を痛そうにしていたので、痛くはなかったのか確かめる。	
		9①	患者さんの今の思いを聞く。	
		9②	車椅子で散歩する。	
		14	受持ち患者さんへ実習終わりの挨拶をする。	
		17	さっき手が冷たいと言っていたから、今、冷たかったら対処する。	
		19	医師との面談がどうだったのか、退院の目途、退院したら自宅か施設かが決まったのか気になっていた。	
		27①	リハビリの前にトイレの声掛けをする。	
		27②	リハビリの時間までコミュニケーションする。認知症の度合いを調べる。	
		28	患者が朝から偏頭痛で薬を飲んで休んでいた。11時からリハビリなので、声をかける。	
		31	どんな話をすればよいか困っていたら、看護師から鏡と櫛と家族の写真を渡され、アトバイス（整容）を受けた。	
		32	日常生活の援助に関する食事の話をする事が出来た。	
		36	3日間のお礼を言う。	
	1日目以外 (11)	2	バイタルサインを測定する。	
		3	どうして便が出ないのか、出ないことで体に不調がないかを聞く。	
		6	患者と車いすで散歩しようと思った。	
		7	朝の挨拶をしよう。	
		11	患者が看護師を待ちかねて、嚥下体操をしなくて食堂に行こうとしたため、声をかけた。(病室に戻したい)	
		13	食事の様子を観察し、注意が必要であれば注意する。	
		16	リハビリの様子を見学したい。話しかけたら気が散っちゃって、色塗りの邪魔しちゃうな。	
		18	退院についてどう思うか、退院後の生活と家族のことについて聞く。	
		30	食事介助の見学をする。	
		34	患者が午前中からリハビリの時間を気にしていた。午後、リハビリの時間になったので声をかける。	
		35	患者さんの長女の方がいつも洗濯物を取りに来てくれるということを話していたので話を広げる。	
		意図なし (8)	1日目 (6)	5
	12			意図を持って会話せずに、沈黙を防ぐために話をした。
	20			事前にシミュレーションしていた内容を患者を実際に目の前にして、不安と緊張で忘れてしまっていた。
	24①			何を話そうか、何を知りたいかを考えずにコミュニケーションをとろうとした。
	26			患者に休憩から戻ったことを伝える。患者の昼食を見ていたので、切り出しやすく、話を広げやすい話題だと思った。
29	自己紹介を済ませ、20~30分ほど会話し、次の話題を考えている。会話を続けようと「会話を広げられる話題」について考え、質問していた。			
2日目 (1)	25		午前の清拭が終わり、患者に会いに行ったら、患者がアイスを持っていた。	
3日目 (1)	33		患者が点滴に気をとられないよう、沈黙にならず、自然で患者も疲れない内容にする。一昨日リハビリの話をしたから、とりあえず話をする。	

する」「ID21 実習させていただくために、まず最初に挨拶しよう」などを記述していた。

一方、意図の記述のない8例には、「ID20 事前にシミュレーションしていた内容を、患者を実際に目の前にして、不安と緊張で忘れてしまっていた」「ID12 意

図を持って会話せずに、沈黙を防ぐために話をした」などの記述が見られた。

3. 意図の表現・了解

「意図あり」の30例のうち、再構成記録が対話の始

表3 意図の表現・了解とコミュニケーション展開例

意図の表現・了解	例数	記述内容の一例		
「○○について話したい」と意図を伝え、了解を得て会話を始める	0例			
「話したい」という気持ちのみ伝える。 意図に沿った話題で会話を始める。	2例	【学生の意図】ID4 気になっていた睡眠のこと、車いすのこと、トイレや室温のことを聞く。 ①【学生】 ノックして返事があった。「失礼します」と言って病室に入る。 「今お時間大丈夫でしたら、お話をさせてもらってもいいですか？」 ②【患者】 「はい、大丈夫ですよ。どうぞ椅子に座ってください」ベッドで端座位になり笑顔で答えてくれた。 ③【学生】 (自主練習を終えたら何うと伝えたので、待っていてくれたのかな) 「ありがとうございます。昨日よく眠れなかったと言っていました、今日はいかがでしたか？」		
「話したい」という気持ちのみ伝える。 意図から外れた話題で会話を始める。	3例	【学生の意図】ID15 患者が不便に思っている事を聞く。 ①【学生】 「失礼します。○○さん、お話を伺いたいと思ってきたのですが、今よろしいですか？」 ②【患者】 ベッドに横になっていた。ニコッと笑って、「いいですよ」と言い座る。「ベッドに座る？怒られるかな」 ③【学生】 (患者に気を遣わせてしまった。) 「では、椅子を借ります。」 「朝ごはん全部食べましたか？」		
「話したい」という気持ちを伝えない。 意図に沿った話題で会話を始める。	9例	【学生の意図】ID3 どうして便が出ないか、出ないことで体に不調がないかを聞く。 ①【学生】 「今、音波やるんですね」と言って、依頼されて準備を手伝う。 ②【患者】 治療中 ③【学生】 (どうしよう、なんて切り出そう。昨日、看護師さん、どうやって聞いたかな。) 「先ほど聞いた排便回数なのですが、便が出ないと言っていました、おなかが詰まった感じはないですか？」		
「話したい」という気持ちを伝えない。 意図から外れた話題で会話を始める。	6例	【学生の意図】ID18 退院についてどう思うか、退院後の生活と家族のことについて聞く。 ①【学生】 「失礼します」と言って病室に入る ②【患者】 「どうぞ、椅子出してすわったら？」 ③【学生】 (昼食が近いから好きな食べ物を聞いて話を広げよう) 「ありがとうございます。もうすぐ昼食ですね。好きな食べ物なんですか？」		

注) 「話したい」という気持ち 意図に沿った話題

まりから記述されているのが20例、会話の途中から記述されているのが10例あった。対話の始まりから記述してある20例について、学生が患者にコミュニケーションの意図を伝え、患者の了解を得てコミュニケーションを始めているかについて分析した。表3にその結果と典型的な記述例を示した。「○○について話を伺いたいのですが、今よろしいでしょうか」というように、意図を明確に伝え、患者の反応を確認したうえでコミュニケーションを始めた例はなかった。意図がありながらそれを伝えず、「話したい」「話を聞きたい」という気持ちの伝達のみでコミュニケーションを始めた例は5例あり、そのうち、意図に沿った話題で会話を始めた例が2例、意図から外れた内容で始めた例が3例であった。また、「話したい」「聞きたい」という気持ちも伝達しないまま、訪室の挨拶に続いて直ちに意図に沿って会話を始めた例が9例、意図や気持ちを

伝達しない上に、意図から外れた話題で会話が始まっていた例が6例あった。

4. コミュニケーション展開

38例の「学生の言動」「患者の言動」を、意図の有無、会話の内容と、意図に沿った表現-反応の回数に着目しながらみると、意図のない場面が多い実習1日目のコミュニケーション展開と、意図のある場面の多い実習3日目のコミュニケーション展開には異なる特徴が見られた。そこで、実習1日目と3日目の再構成記録の、コミュニケーション開始から終了までの記述内容について、1場面あたりの話題数、1話題あたりの学生と患者の表現-反応回数を見てみた(表4)。

実習1日目の、「意図あり」3例、「意図なし」6例、計9例について、1例ごとに、コミュニケーションの開始から終了までに取り上げられている話題数、1話

表4 実習1日目と3日目の意図の有無，コミュニケーション展開の特徴

実習日	意図の有無	ID	意図の記述内容	話題数	話題毎の表現 - 反応の総数
1日目	意図あり (3)	24②	【教員を見学後】 就寝時間、起床時間を知りたい、家ででの生活と違う点は何か、家でどのような生活をしてきたかを聞く	3	14 (意図に沿った内容) 2 9
		1	より良い人間関係を築くために、カルテの情報を入れて会話する。	4	5 2 2 4 2 (意図に沿った内容)
		21	【初めての会話】 実習させていただくため、まず最初に挨拶しようと思った。リハビリの後で患者が疲れていると思い、自己紹介だけして帰ろうと考えていた。	5	2 (自己紹介：意図に沿った内容) 3 3 4 6
	意図なし (6)	5	【初めての会話】 自己紹介後、会話がなくなったらリハビリの話をしようと思っていたが、何を聞けばいいのかわからなくなった。	5	1 (自己紹介) 4 2 6 2 (中絶)
		12	【初めての会話】 意図を持って会話せずに、沈黙を防ぐために話をした。	5	2 (自己紹介) 6 (複数回聞き返し) 3 2 2
		20	【初めての会話】 事前にシミュレーションしていた内容を患者を実際に目の前にして、不安と緊張で忘れてしまっていた。	6	2 (自己紹介) 2 4 2 2 2
		24①	【初めての会話】 何を話そうか、何を知りたいかを考えずにコミュニケーションをとろうとした。	3	2 (自己紹介) 3 5
		29	【初めての会話】 自己紹介を済ませ、20～30分ほど会話し、次の話題を考えている。会話を続けようとして「会話を広げられる話題」について考え、質問していた。	2	7 3
		26	患者に休憩から戻ったことを伝える。患者の昼食を見ていたので、切り出しやすく、話を広げやすい話題だと思った。	2	2 9
	話題数の合計35、表現-反応の合計131回、1話題あたりの表現-反応の回数：平均3.7回				
3日目	意図あり (13)	9①	患者さんの今の思いを聞く。	1	18 (意図に沿った内容)
		9②	車椅子で散歩する。	1	9 (意図に沿った内容)
		19	医師との面談がどうだったのか、退院の目途、退院したら自宅か施設かが決まったのか気になっていた。	1	10 (意図に沿った内容)
		27①	リハビリの前にトイレの声掛けをする。	1	9 (意図に沿った内容)
		28	患者が朝から偏頭痛で薬を飲んで休んでいた。11時からリハビリなので、声をかける。	1	18 (意図に沿った内容)
		8	患者がリハビリ中に腰を痛そうにしていたので、痛くはなかったのか確かめる。	2	12 (意図に沿った内容) 4
		14	受持ち患者さんへ実習終わりの挨拶をする。	2	4 3 (意図に沿った内容)
		17	さっき手が冷たいと言っていたから、今、冷たかったら対処する。	2	13 (意図に沿った内容) 2
		31	どんな話をすればよいか困っていたら、看護師から鏡と櫛と家族の写真を渡され、アドバイス（整容）を受けた。	2	10 (意図に沿った内容) 4
		36	3日間のお礼を言う。	2	4 3 (意図に沿った内容)
		4	気になっていた睡眠のこと、車いすのこと、トイレや室温のことを聞く。	3	11 (意図に沿った内容) 3 3
		32	日常生活の援助に関する食事の話をすることが出来た。	3	6 7 (意図に沿った内容) 7
	27②	リハビリの時間までコミュニケーションする。認知症の度合いを調べる。	6	5 10 (意図に沿った内容) 9 5 5 2 (中絶)	
意図なし (1)	33	患者が点滴に気をとられないよう、沈黙にならず、自然で患者も疲れない内容にする。一昨日リハビリの話をしたから、とりあえず話をする。	2	4 (リハビリの話) 11 (患者が切り出した話題)	
話題数の合計29、表現-反応の合計211回、1話題あたりの表現-反応の回数：平均7.3回					

表5 実習1日目「意図なし」のコミュニケーションの展開例 (ID20)

場面の説明		病院実習1日目で受け持ちの患者さんへ看護師長さんと挨拶に行った場面。師長さんと受け持ち患者さんの会話を見て、「こんな感じのお話してね」と師長さんから言われ、師長さんが退室したあと。		
患者が話したこと・行ったこと	自分が考えたこと・感じたこと	自分が話したこと・行ったこと	話題毎の表現-反応の総数	
① ベッドに右側臥位になっており、私の存在に気がついていて、視線が合う。	② 師長さんのように上手に話せるか不安になっていた。とりあえず挨拶をしようと思った	③ 「〇〇さん、こんにちは。今日から実習に来た〇〇です。よろしくお願いします」	2 (自己紹介)	
④ 「ああ、ご苦労さん、頑張つてや」	⑤ とても優しそうで安心した。しかし、さっき師長さんと家族の話をしてきたから、次に何を話そうか戸惑う			
		⑥ 「〇〇さんはもう病院生活に慣れましたか」	2	
⑦ 「うーん。まずね」	⑧ 「まだ慣れなくて大変だよ」と返ってきて「どんなことが大変ですか」と聞こうと思っていたので、慌てる			
		⑨ 「病院の食事はおいしいですか」	4	
⑩ 「ん……？」	⑪ 少し早口にしゃべってしまったかなと思い、申し訳なく思った	⑫ 「すみません。食事はおいしいですか」		
⑬ 「ああ……おいしいよ」				
	⑭ すぐに会話がなくなってしまい、あわてて次の質問を考えた	⑮ 「夜は眠れていますか」	2	
⑯ 「とりあえず眠れてますよ」				
	⑰ 会話が終わり、沈黙を避けなければと思い、次の質問を考えた	⑱ 「さっき、家族の話してましたけど、お孫さんは何人いるんですか？」	2	
⑲ 「リハビリのところにきてきな。そっちの方が勉強になるよ」2回言った	⑳ 質問にちゃんと返してくれなくて、まずい話をしてしまったかなと思う。もう少し話をしたいと思った	㉑ 沈黙が続いてしまった		
㉒ 「少し起き上がりたいんだけど。起こして」	㉓ どのような障害を抱えているかもわからないし、許可もなく患者さんを起こして、取り返しのつかないことになってしまったらどうしようと焦る	㉔ 「えっと……。すみません。ちょっと……。どうしました」	2 (学生の記述の中断)	

題あたりの学生と患者の表現-反応回数をみると、話題数は合計35、1例あたり平均話題数が3.9、表現-反応回数は合計131回であった。1話題あたりの表現-反応回数は平均3.7回であった。

一方、実習3日目の「意図あり」13例、「意図なし」1例、計14例の話題数は合計29、1例あたりの平均話題数は2.1、表現-反応回数は211回であった。1話題あたりの表現-反応回数は平均7.3回であった。

次に、「意図あり」の、意図に沿って展開された表現-反応の回数をみた。実習1日目の3例についてみると、ID24②が14回と多いものの、ID1は2回、

ID21は2回であった。実習3日目は、意図に沿った話題だけで場面が展開している例が4例あり、意図に関する内容の表現-反応は平均10.2回であった。

表5に、実習1日目のコミュニケーション展開の1例（「意図なし」）を、表6に実習3日目のコミュニケーション展開の1例（「意図あり」）を表す。表5のID20は、初めて患者と対話する場面である。1日目の初めて患者と対話した場面を記述した他の4例（「意図あり」1例、「意図なし」3例）もID20と類似したコミュニケーション展開であった。展開は、③「今日から実習に来た〇〇です、よろしくお願いします」、④

表6 実習3日目「意図あり」のコミュニケーションの展開例 (ID28)

場面の説明		朝から片頭痛があり薬を飲んで少し休んでいた。11時からリハビリなので声をかけに行った場面		
患者が話したこと・行ったこと	自分が考えたこと・感じたこと	自分が話したこと・行ったこと	話題毎の表現-反応の総数	
		① 「失礼します」		
	② 大丈夫かな……			
③ 「あっ」	④ あ、おこしちゃったかな……	⑤ 「頭痛大丈夫ですか？」 「もうすぐリハビリのお時間なので声かけに来ましたよ」	18	
⑥ 「あっもうそんな時間なんだ……」	⑦ 頭痛のこと聞かなきゃ！	⑧ 「あ、はい。」 「痛みの方はどうですか？」		
⑨ 「結構よくなったよ。元々偏頭痛持ちだから、いつもよりはだいぶいいよ」		⑩ 「あ、そうですか。良かったです」		
	⑪ まだ行かないのかな……			
⑫ 「あと、10分くらいしたら動くね。それからトイレに行って……ナースステーションにいる？」	⑬ やっぱりまだ痛いのかな	⑭ 「はい」		
⑮ 「終わったら迎えに行くから待ってて」		⑯ 「わかりました」		
⑰ 「ごめんねー。遅くなっちゃった」	⑱ 外で待ってたから気使わせちゃったかな？	⑲ 「大丈夫ですよ。行きましょう」		
⑳ リハビリ室に着き、左大腿部に電気を流している最中		㉑ 「薬は効いていますか？」		
㉒ 「うん、だいぶよくなったよ。昨日の夜から痛くて、寝れば治ると思うんだけどな」	㉓ 頭痛のこと聞き出そう	㉔ 「あーそうなんですか」「いつもは寝たら治るんですか？」		
㉕ 「ううん。治らない(笑)」	㉖ リハビリ来たくなかったんじゃないのかな？	㉖ 「あー。(笑)」 「頭痛って嫌ですよ。何もやる気なくなっちゃいますよね」		
㉗ 「まあね。でも1日でも早く帰りたいからね。足動くようになりたいし」		㉗ 「そうですね」		

「ご苦労さん、頑張ってや」と自己紹介（表現-反応回数2回）したあと、すぐに次の話題を探し、⑥「病院生活に慣れましたか」、⑦「うーん、まずね（慣れた）」の質問-応答（2回）、話題を変えて⑨「病院の食事はおいしいですか」（4回）、⑮「夜は眠れていますか」（2回）のように、一往復の質問-応答で話題が次々と転換していた。この場面では、最後には患者のほうから⑱「リハビリに行ったほうが勉強になるよ」と話して対話を終えようとしている。

一方、表6の「意図あり」の例 (ID28) は、意図に沿った内容で複数の表現-反応を繰り返すコミュニケーション展開になっている。学生は患者が偏頭痛で休んでいるという情報を得ており、リハビリ開始時間

になったが、「偏頭痛の具合がどうか」を気にしており、リハビリ前やリハビリ中の状況、薬は効いているか、どのようにしたら頭痛が軽減するのかななどを表現の仕方を様々に変えて患者に質問し、確認している。

IV. 考 察

1. 意図の有無とコミュニケーション展開の特徴

38例のコミュニケーション場面は、意図のある場面が30例、意図のない場面が8例であった。意図のある30例は実習2日目・3日目が多く、意図のない8例は実習1日目が多かった。このことから、学生は、実習初日には意図のないまま患者に対面し、コミュニケー

ションをしていたこと、実習2日目・3日目には意図を持ってコミュニケーションをしていたことが示された。

1) 実習1日目のコミュニケーションの特徴

実習1日目の学生の多くは、表2に示したように「何を話そうか、何を知りたいのかを考えずにコミュニケーションをとろうとした」とある。このことは、学生が、実習1日目の、患者と初めて会話する際のコミュニケーションの目的を十分に理解していなかったことを示していると考えられる。表4の受け持ち患者と初めて会話する場面を記述した5例のいずれも、場面の始まりに自己紹介を行っているものの、その展開は表5に示した例と同様に「○○です、よろしく申し上げます」の一言で自己紹介を終え、患者の返事を確認した後、すぐ次の話題に転換していることから言える。ウィーデンバックら(2004)は、看護師がコミュニケーションを行う意図は、治療的な面と信頼関係の確立であると述べている。また、外口(1999)は、看護婦-患者関係の発展過程に①関係を持ち始める時期、②関係を持ち続ける時期、③新たな関係に向かう時期の3局面があり、①関係を持ち始める時期では、看護師も患者も互いにどのような考え方や反応をするのか未知の状態にあるため、ケアについての合意を作り上げることを目指すと述べている。実習初日の初めて対話する場面のコミュニケーションの意図は、患者との信頼関係の構築であり、そのために学生は、自己紹介を十分に行い、患者に理解してもらった上で、患者のことを知るためのコミュニケーションを始める必要がある。しかし、学生にはそのことが認識されていなかったために、氏名や所属だけを伝える簡単な自己紹介で次の話題に転換したのだと考える。

川野(2006)は、外口(1999)の述べる発展過程は患者-看護学生関係にも応用できるとし、患者と知り合い、目標を共有する第1段階の課題を達成するために患者に伝えるべきこととして、①名前、②所属、③学年、④実習期間・曜日・時間、⑤実習目標の5つがあると述べている。また、⑤実習目標については、学生の目標ではなく、患者にとっての目標をお互いが共有することにあるとしている。実習初日に、患者と看護学生が初めて対面する場面では、臨地実習指導者や教員が仲介して学生を紹介することもあるため、患者は学生が名前だけを告げても患者を受け入れる反応を返している。しかし、学生が、自己紹介することが

患者-看護者の信頼関係構築という意図を達成するためには重要であるということ認識し、行動できるためにも、教員は、名前と所属だけではなく、実習期間や、どのような目的の実習であるかなどを伝えた上で患者に了解を得ることを指導する必要がある。また、自己紹介する際の態度や言葉遣いなども患者との信頼関係構築には重要な送り手としてのメッセージであるため、どのように自己紹介するかを学生に具体的にイメージさせてから患者と対面させる必要があると考える。

また、実習初日の学生の心理状態も意図のないコミュニケーション展開に影響したと考える。表2の記述では、「事前にシミュレーションしていた内容を、患者を目の前にして、不安と緊張で忘れてしまった」「リハビリの話をしようと思っていたが、何を聞けばよいのかが分からなくなった」とあるように、実習初日の学生は、初めて患者と1対1で接することで、過度の緊張状態に陥る傾向がある。これは、二重作(2005)が「患者-看護師関係」を初めて経験する学生は、受け持ち患者の疾病に関する知識が乏しいうえ、緊張感や不安感があると述べていることと一致している。ウィリアム・S・ハウエルと久米(1997)は、緊張状態では、モノログという、2人で会話しているふとした隙に、自己の内部で自問自答している状態が活発になり、相手の話の中身に集中できなくなったり、冷静な時と比べて対応の仕方に歪みが出ると述べている。学生は緊張状態の中で、話そうと思っていたことを忘れてしまってもなお、「沈黙を避け」「会話を続けなければならない」と考え、自分がどのようにその場面を切り抜けるかに意識が向いた状態でコミュニケーションを続けていたことが推察される。その結果、相手の反応の意味を深く考えたり、そこから新たな質問につなげようとするのではなく、表5の例が、「食事はおいしいですか」「夜は眠れていますか」「お孫さんは何人ですか」などのクローズド・クエスションを用いて矢継ぎ早に質問し、患者から返答があれば次の話題に転換しているように、短い表現-反応を繰り返し、話題を次々に転換してしまうコミュニケーション展開になるのではないかと考える。

実習初日、学生が初めて受け持ち患者とコミュニケーションする場面では、学生は自己紹介が十分でない上に、意図がなく、脈絡のない話題が次々に転換するコミュニケーション展開をしている。この場合、対

応する患者は、学生がどんな目的で話しているのか、自分の返答が学生にどのように受け止められたのか、学生とのコミュニケーションにどのような意味があるのかが判然としないまま、急な話題の転換に困惑した状態で会話を続けなければならないことになる。そのために患者は気分不安定や不快感が高まり、信頼関係の構築は妨げられると考えられる。学生がこのようなコミュニケーションをする背景には、「患者を目の前にして、不安と緊張で忘れてしまった」「何を聞けばよいかが分からなくなった」に示されているように、初めての臨地時実習であるための極度の緊張感があると考えられる。教員は、学生の多くが初日にこのような緊張状態にあることを認識し、少しでも緊張が緩和した状態で受け持ち患者とコミュニケーションが行えるように支援する必要がある。実習1日目であっても、ID24②は、指導教員のコミュニケーション場面を見学した後、明確な意図を持ってコミュニケーションに臨み、意図に沿ったコミュニケーション展開ができた。この例では、明確な意図を持っていたことに加え、教員の行ったコミュニケーションがモデルとして作用し、学生が自己のコミュニケーションの仕方との違いに気づくと共に、コミュニケーションの進め方を実践的に学ぶ機会となり、円滑にコミュニケーションを行うことができたのではないかと考えられる。教員は必要に応じて、自らモデルとなってコミュニケーションをして見せたり、有能な看護師のコミュニケーションの仕方を見学できる機会を作るなど、調整することも必要であると考えられる。

2) 実習3日目のコミュニケーションの特徴

実習3日目の学生のコミュニケーションは、14例中「意図あり」が13例であった。このことは、3日間という短い期間の実習であっても、実習が進むことによって、学生は、何らかの意図をもって受け持ち患者とコミュニケーションすることができるようになることを示している。

大池ら(2000)が初回臨地実習の学生のプロセスレコードを分析した際、コミュニケーション場面で最も多かったのは、情報収集やモーニングケア・環境整備、挨拶・面接ではなく、日常会話であったと報告している。しかし、本研究では、学生の多くが、日常会話ではなく、看護と結びつけて、問題の原因・状況・患者への影響を捉えようとコミュニケーションしていたり、車いすでの散歩、食事の見守り・声掛けなど、

日常生活の援助を目的にコミュニケーションしていた。このことは、短期間の実習ではあるが、その間にも学生は、患者の困難や不便、苦痛などの患者の安寧を妨げていることに注目できるようになり、看護の視点で患者を見守り、コミュニケーションできるようになることを示している。このような変化の要因として次のことが考えられる。本実習は初めての臨地実習であるが、学生は患者を受け持って実習しているため、その患者と毎日接することでお互いの理解が深まり、徐々に緊張状態が緩和すること、毎日のカンファレンスや実習記録の指導を通して受け持ち患者とのコミュニケーションの振り返りをさせ、さらに面接指導をしてその日のうちに学生の疑問に答えていること、実習2日目、3日目の実習目標設定に際し、日々の患者の状態や実習での体験を踏まえて目標設定するように指導・助言していることなどが、学生のコミュニケーションや看護に対する意識を高め、また、学生の意識を看護の視点に向かわせることに繋がっているのではないかと考えられる。

また、学生が意図として記述していた「患者がリハビリ中に腰を痛そうにしていたので、痛くはなかったのか確かめる」「医師の面談がどうだったのか、退院の目途、退院したら自宅か施設かが決まったのか気になっていた」などは、実習1日目、2日目のコミュニケーションや観察を通じて把握した情報を基に、学生の中に看護の実践につながる「気がかり」が生まれていることを示している。外口(1999)が述べる看護婦-患者関係の発展過程で考えると、実習1日目の関係をもちはじめる時期から、関係をもちつづける時期、つまり、看護者と患者の間で問題が浮かび上がってきて、その課題に取り組む時期へと関係が変化し始めていることが考えられる。

ウィーデンバックら(2004)は、効果的な看護のためのコミュニケーションには、「意図の明快さ」「知識の豊富さ」「態度」「感受性」「判断力」が必要であるとしている。本学の基礎看護学実習Iに臨む学生は、疾病や看護過程の展開に関する授業をまだ受けていない。そのため、「意図の明快さ」だけでは、看護に結び付くための効果的なコミュニケーションが出来ない。そのことは、学生のコミュニケーション展開が、今回の結果には示さなかったが、患者の表現(言動)に含まれている意味を汲み取ることができず表面的な反応を返していたり、患者の言動の意味を理解するた

めの反応を患者に返すことができず、自己の推測に基づいて反応したり、安易な肯定、是認、保証を与えてコミュニケーションを進めていることでも示されている。しかし、南（1967）は、コミュニケーションの実施では、「送り手はコミュニケーションの内容を表現して受け手に伝えようとする。受け手は理解しようという努力によって、伝えられる内容に対して反応（聞き入る、相槌など）を起こす。受け手の反応を見た送り手は、自分の話し方や内容を調節すること」が必要であり、そのことによって、「送り手と受け手の間に、表現と反応を結びつける理解と調節の相互作用が生まれる」と述べている。初めての臨地実習であっても、コミュニケーションの意図を明確にすることに重きを置いて実習指導することによって、コミュニケーションは意図を達成するために、患者の反応をみながら、質問の仕方や内容を調節して進める相互作用であることを理解させることができるのではないかと考える。

2. 意図の表現・了解

「意図あり」の学生のコミュニケーションの始め方について分析したところ、自分の意図を明確に伝えてコミュニケーションを始めている例はなく、患者に「話をしたいが、今できる状態か」を確認している場面も少なかった。また、会話の内容が意図に沿った話題で始まる場面が19場面中10場面であり、他の9場面は、意図から外れた話題で始めていた。このことから、学生は、意図のあるコミュニケーションをする場合でも、始めに、患者にその意図を十分に伝えずにコミュニケーションする傾向があることが明らかとなった。

南（1967）は「送り手の意図と受け手のなんらかの知識を得ようという要求は、たがいに知られているか、少なくとも、たがいにそれを知ろうとする努力が払われている。そうして、送り手と受け手の意図と要求が対応しているという前提のもとにコミュニケーションが発発する」と述べている。臨地実習で学生が受け持つ患者は、事前に臨地実習指導者や教員から実習の趣旨について説明を受け、同意している。表3の「患者の言動」に、学生が病室に入っただけで「椅子に座って」という発言も見られることから、患者は、学生が「お話をしに来ました」ということをあえて伝えなくとも、病室を訪れたことで学生が会話をしに来たということを察して応答していることが伺える。しかし、学生が話したいと思っても、患者にはそれに応じ

られない事情や状況があることも考えられるため、相手はそれに応じることが可能かを確認することは必要である。また、コミュニケーションするということを知り、了解しても、「どんな話題であるか」については、学生がそれを明確に伝えなければ、患者は察することは難しく、学生が話し始めた言葉から学生の意図を様々な推察しながら返答し、コミュニケーションを展開していかなければならない。また、たとえ学生が意図のあるコミュニケーションを展開しようとしても、意図から外れた話題でコミュニケーションを始めてしまうと、患者も学生の意図を誤って理解し、本来の意図から外れた展開になってしまうと考えられる。送り手は相手に意図を伝え、互いに了解して会話を始めるということは、コミュニケーションの基本である。コミュニケーションを行うには、そのような前提を整えることの重要性とその具体的な方法について、授業・実習を通して教育・指導して必要がある。

3. 研究の限界と今後の課題

今回、学生が受け持ち患者とどのようにコミュニケーションを行っているのかを明らかにすることを目的に、初回臨地実習における看護学生の患者とのコミュニケーションの再構成記録を、「意図」に着目して分析した。「再構成記録」は、コミュニケーションを行ったその日のうちに記述するよう指導しているが、記憶を辿って記録するため、事実が、細部まで詳細に、正確に記述されているとは限らないという限界がある。また、対象学生は授業で南（1967）の理論に基づいた講義とロールプレイングでの学習を終えていたが、臨地実習で授業での学習と実践での体験を関連させて記述することが難しい学生もいる。データはコミュニケーション中の意識の清明さ、注意力、記憶力、記憶の正確な想起に負うところが大きく、そのことがデータにも影響する。また、経日的な変化を把握するにはデータ数が均等でなかった。

今後これらの影響を最小にする方策を考え、研究を継続・発展させたいと考えている。

V. ま と め

初回臨地実習における学生と受け持ち患者とのコミュニケーションの再構成記録38例の分析から、学生のコミュニケーションについて次のことが明らかと

なった。

1. 3日間の実習期間内で、学生のコミュニケーション展開には変化が見られた。
2. ほとんどの学生は「意図」を持って患者とコミュニケーションをしているが、「意図」を持たないままコミュニケーションを始めることもある。「意図」を持たないままのコミュニケーションは実習1日目に多く、実習3日目にはほとんどが「意図」を持ってコミュニケーションを行っていた。
3. コミュニケーションの「意図」は、＜入院生活の様子を把握する＞、＜情報を確認する＞、＜観察や援助を実施する＞、＜挨拶をする＞などであった。
4. 実習初日のコミュニケーション展開は、質問-応答といった一往復程度の表現-反応で、話題が次々に転換する。実習3日目では、意図に即した一つの話題での表現-反応を複数回繰り返すコミュニケーション展開となり、1話題あたりの表現-反応回数は平均7.3回で、1日目の約2倍であった。
5. 実習3日目には、多くの学生が、看護と結びつけて、問題の原因・状況・患者への影響を捉えようとしたり、日常生活の援助を目的にコミュニケーションしており、受け持ち患者とのコミュニケーションの振り返りや、実習目標設定の際の指導によって、短期間の実習でも学生は、看護の視点で患者を見守り、コミュニケーションできるようになる。
6. 意図があって臨んだコミュニケーションであっても、学生は患者に意図を伝えないでコミュニケーションを始めていた。

以上のことから、初回の看護実習においては、実習初日、患者と接する前に、コミュニケーションについての具体的な指導が必要であること、指導によって短期間の実習であっても学生のコミュニケーション能力は向上すること、コミュニケーションの意図を明確にすることを指導し、教員や看護師がコミュニケーションモデルを示すことは教育的な意義があることが示唆された。

引用文献

- 1) 二重作清子ほか (2005), 地域で実施する基礎看護学

- 実習の取り組みと今後の課題-学生の病院実習における患者とのコミュニケーションの認識-, 日本赤十字九州国際看護大学, 3, 115-124
- 2) 林智子ほか (2012), 看護初学者のプロセスレコードからみるコミュニケーションの特徴, 三重看護学誌, 14 (1), 141-148
- 3) Howell WS, 久米昭元 (1997), 感性のコミュニケーション-対人融和のダイナミズムを探る- (第3版), 大修館書店, 東京
- 4) 井上京子ほか (2006), 対人場面において看護学生が着目する送り手のメッセージ手段, 日本看護学教育学会誌, 15 (3), 1-11
- 5) 岩崎仁美ほか (1999), 初回臨地実習における看護学生のコミュニケーション技術の実態とその指導の方向性-プロセスレコードの分析より-, 九州国立看護教育紀要, 2 (1), 33-39
- 6) 蒲谷博 (2002), 「意図」とは何か-「意図」をどのように捉えるか-, 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, 15, 1-14
- 7) 川野雅資 (2006), 患者-看護師関係とロールプレイング (第1版第6刷), 日本看護協会出版会, 東京
- 8) 川田智美ほか (2005), 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面, 群馬保健学紀要, 26, 133-140
- 9) 工藤せい子ほか (2010), 看護学生と看護者の言語的コミュニケーションの特徴-ロールプレイングにおける言語量と会話内容の分析から-, 弘前大学保健学科紀要, 9, 11-20
- 10) 久米弥寿子 (2005), ロールプレイング演習における看護学生の言語的・非言語的コミュニケーション行動の特徴に基づく演習プログラムの検討-行動コーディングシステムによる内容と出現パターンの分析-, 日本看護研究学会雑誌, 28 (1), 63-71
- 11) 南博 (1967), 体系社会心理学 (第10版), 光文社, 東京
- 12) 岡尾麻紀ほか (2010), 患者の内面への関心の寄せ方について-基礎看護学実習における学生のプロセスレコード分析を通して-, 福岡女学院大学紀要, 1, 33-41
- 13) 大池美也子ほか (2000), 初回基礎看護実習におけるプロセスレコードの分析-コミュニケーションのつまづきに場面に焦点をあてて-, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 9-14
- 14) 酒井美子 (2010), コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 5, 103-114
- 15) 外口玉子 (1999), 系統看護学講座 専門25 精神看護学 I (第1版第4刷), 医学書院, 東京
- 16) Wiedenback E ほか (1979) / 池田明子 (2004), コミュニケーション-効果的な看護を展開する鍵 (第25刷), 日本看護協会出版会, 東京

**THE CHARACTERISTICS OF THE NURSING STUDENTS'
COMMUNICATION DEPLOYMENT IN FIRST CLINICAL PRACTICE
-ANALYSIS OF COMMUNICATION RECORDS BETWEEN STUDENTS
AND PATIENTS-**

Naoko WATABE¹⁾, Chikako KUDO¹⁾, Teruko ABE¹⁾

Abstract: This study aims to analyze the reconstructed records of conversations held between students and patients during their initial practical training. This was performed to identify any characteristics in the conversations for training purposes. Details of 38 samples of records were analyzed based on Minami's theory; to determine whether there is an intention, whether the intention is communicated with the patient, and whether communication based on an intention is being developed. The results revealed that communication with an intention was noted in 29 samples and commonly observed on the second and third days of the practical; communication without intention mostly occurred on the first day of the practical. Furthermore, the students exhibited a tendency to start communication without conveying their intention to their patients, if they had one. Intentions behind communication included: *ascertaining the patient's state during hospitalization, information confirmation, conducting observation and assistance, and greetings.*

When an intention existed, there was a tendency for a single topic to be repeated several times. When an intention did not exist, the tendency revealed was that topics kept shifting from one to another randomly in a short cycle of a question and an answer, in which a student asked a question with the patient answering it, and then the student changed the topic and asked the next question.

Key words : initial practical training, communication, intention, reconstructed record

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

TEL : 0172-31-7100, FAX : 0172-31-7101, E-mail : nwatabe@hirogaku-u.ac.jp